

必読！茅ヶ崎の歴史図書・900 冊

ーある青年教師との郷土史問答ー

平山孝通*

1 はじめに

平成 22 年（2010）の 1 月早々に、茅ヶ崎市役所の総合案内を 20 代半ばの青年が訪ねた。

「茅ヶ崎の郷土史を調べる方法を伺いたいが、どの担当を訪ねればよいか」とのことであった。市史編さん担当に連絡があり、早速その青年が現れた。自己紹介を聞くに、新任の中学校の社会科の教師とのことであった。問答形式で、その顛末を記しておきたい。窓口のレファレンスの一例として、郷土史入門の一助になれば幸いといえる。

蛇足ながら、その教師は（新婚で）野球部の監督で、『文化資料館調査研究報告』（18）に掲載した拙文「全国高校野球選手権神奈川大会ノート」を目にされたとのことであった。少々感激。願わくば市内の中学校野球大会の事例をまとめていただきたいものである。

2 郷土史に関する参考資料・参考文献の所在

日 時：平成 22 年 1 月上旬

場 所：茅ヶ崎市企画部文化推進課

市史編さん担当の窓口

登場人物：中学校の社会科の青年教師

中年担当職員

Q 1：私は、新任の中学校の社会科の教師です。出身は市外で、茅ヶ崎市の歴史に関してほとんど知りませんので、知りたいと思っていますが、何をどのように調べればよいか分かりません。何か手がかりがあればと思っています。近いうちに総合学習で茅ヶ崎の歴史を生徒と一緒に調べる必要

があります。先輩の教師から『茅ヶ崎市史』があることは教わりましたが、大部な書籍なので活用方法、資料の所在などをご指導いただきたいと思います。市立図書館には何度か行きました。大学は社会学部社会学科で、史学科の出身者より歴史の知識は少なく、これからが勉強だと考えています。

A：分かりました。調べる方法は、幾つもあります。

まず、参考図書の所在を確認しましょう。当然学校にはたくさんの参考図書があると思います。一番多いのは、茅ヶ崎市立図書館です。本館、香川分館（香川公民館に併設）、分室 8 カ所（小出支所・公民館 4 館－香川公民館は除く－・青少年会館・浜須賀会館・小和田地区コミセン）、しおかぜ号（巡回図書館車、18 カ所巡回）におよそ 49 万冊を所蔵しています。図書館本館の 2 階の参考図書室には市域関係の図書、論文はもとより、基本的な資料集、辞典類、神奈川県関係の参考図書の多くが収集されています。

いきなり 49 万冊もの図書をどのように扱えばよいのか苦慮するところですが、テーマが決まっていれば、図書館の検索機でキーワードを入力すればたちどころに何冊かの図書を検索することが可能です。検索機の扱いは、レファレンスの担当職員に声を掛ければ手伝ってくれます。書架に出ている図書はほんの一部なので書庫内の図書の利用をお勧めします。一般の利用者が手にしない図書なので興味深いヒントが得られる可能性も高いといえます。コピーは有料

ですが特殊な図書以外は可能です。カラーコピーも教材には有効な手段かと思えます。コピー機の操作が苦手な方、重い図書などもレファレンスの担当職員がお手伝いをします。土日休日は5時閉館ですが、平日は7時まで開館していますのでゆっくりと利用が出来ます。なお、香川分館は金曜日のみ7時まで開館しています。分室とおかせ号の利用時間は確認してください。原則、図書館は月曜日が休館で、無料で利用できます。手続きをすれば、広域利用で藤沢市、平塚市、寒川町の公立図書館の蔵書も貸し出しが可能です。あわせて100万冊近い蔵書から選択が可能となり、ほぼ市域の研究や教材研究には十分な資料群といえます。少々時間がかかりますが、県立図書館や国立国会図書館の蔵書も条件付きですが借りることができます。

Q2: 郷土史というだけでテーマはまだ決まっています。49万冊もの中からどの本を手にするか検討がつきません。

A: 分かりました。『平成20年度 図書館年報（茅ヶ崎市立図書館概要）』の「蔵書内訳」を参考に、49万冊をもう少し検討してみましょう。49万冊の内、31%は児童図書（15万冊）、69%が一般図書（34万冊）です。昔話・紙芝居などの児童図書も民話などを研究する上で参考になると思いますが、まずは一般図書の34万冊を対象としましょう。

図書館の蔵書は、「日本十進分類法」で配架されています。

その分類の「2, 歴史」と「K, 郷土資料」に絞るのは少々異論もあるでしょう。「9, 文学」の中には国木田独步、平塚らいてう、城山三郎、開高健など市域ゆかり文人のエッセイなども含まれていますので参考にな

ると思いますが、まずは「2, 歴史」（29,565冊、全体の6%）と「K, 郷土資料」（23,370冊、同4.8%）を対象としましょう。52,935冊（同10.8%）が対象となりました。

「2, 歴史」の資料や資料紹介の中に茅ヶ崎の事例が幾つか含まれていますが、数が少ないので、「K, 郷土資料」のみを対象とします。郷土資料は利用頻度も多く、保存用も考えて複数の図書を所蔵することが多いので、ほぼ半数の1万冊と考えましょう。しかし、対象から外した「2, 歴史」はいつでも参考にしてください。

Q3: 図書館の蔵書の49万冊のうち対象が1万冊に絞られましたが、初心者にはまだまだ大変な数です。1万冊を手にして利用した方はどのくらいおられるのでしょうか。図書館の司書の方はご覧になっているのでしょうか。もう少し絞ってはいただけませんか。

A: 館の職員の司書や司書補でも全てを手にした人はどのくらいでしょうか。

例えば、歴史学ですと古代・中世・近世・近代・現代史、地名、戦争、検閲、映画、大岡越前守忠相の事跡、別荘、南湖院、純水館、茅ヶ崎八景、駅の変遷、道の由来など。民俗学ですと浜降祭、漁労、農耕、食制、道祖神、庚申塔、民話、伝説、民家、年中行事、通過儀礼、郷土芸能、柳田国男など。考古学ですと縄文時代、弥生時代、古墳時代、下寺尾七堂伽藍、高座郡衙、旧相模川橋脚、戦争遺跡など。自然史ですと植物、昆虫（とりわけクマゼミ）、地質、鳥類、魚類、帰化動植物、烏帽子岩、平島、相模川、小出川、千ノ川、駒寄川など、多くのテーマが設定できると思います。幾つかの分野に関わるテーマもあります。

まだ、研究テーマが決まっていないう

ですので、大変な冒険ですが、必読図書を900冊ほどに絞ってみましょう。その中でご自分が興味を引かれるものを選択すればよろしいかと思います。茅ヶ崎市教育委員会、市役所、文化振興財団、郷土会、文教大学などで刊行した図書・研究紀要・調査報告・パンフレット・レジュメ・チラシなどを中心に選択してみましょう。

Q4: 49万冊から、900冊に絞っていただきましたが、正直なところ私にはもっと絞って、必読100冊、必読50冊、必読10冊位迄にしていただければうれしいのですが。最後にこれぞ茅ヶ崎の郷土史「ベスト1冊」というのはいかがでしょうか。

A: 「ベスト1冊」は、個人の基準で選んでいただきたいと思います。大変難しいでしょうが、分野ごとの必読50冊、必読10冊は必要だと思います。「主要文献」という考え方で絞り込むことは可能といえるでしょう。小中学生の宿題や総合学習の参考に役立つと思います。新しい論文や報告書が刊行されれば更新の必要が生じます。

では、機関別に刊行物をみてみましょう。

茅ヶ崎市教育委員会生涯学習部図書館（東海岸北1丁目 0467-87-1001）は、本館、香川分館、分室8カ所、しおかぜ号に分散しての所蔵ですが、49万冊の蔵書を誇っています。

刊行物としては、年3回刊行の『としょかん、茅ヶ崎市立図書館報』があります。事業紹介・報告が主ですが、郷土に関する紹介記事も参考になります。「高砂緑地の文学碑の紹介」「図書館所蔵の三橋兄弟治・臼井恵之輔らの美術作品の紹介」などです。古くは「西方貝塚一発掘の参加の記録」などにみるべきものがあります。最新号は22

年1月に第132号を刊行し、無料で配布をしています。バックナンバーの用意もあります。

茅ヶ崎市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護担当（茅ヶ崎1丁目 82-1111）は、昭和30年代からの多くの刊行物があります。在庫切れも多いので、図書館などで利用してください。シリーズのものをみてみましょう。

『文化財資料集』（13冊）、『資料館叢書』（11冊）、『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』（33冊）、『茅ヶ崎ゆかりの人物誌』、『ぶらり散歩郷土再発見』（6冊）、『としよりの話』（2冊）、『茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』（20冊）、『遺跡見学会レジュメ』、『茅ヶ崎の社会教育』、『生涯学習事業のまとめ』、『丸ごと博物館ガイド養成講座及びフィールドワークレジュメ』ほか、最近の代表的な刊行物としては『旧相模川橋脚』があります。（文化財保護担当は90冊以上刊行）

茅ヶ崎市文化資料館（中海岸2丁目 85-1733）は、考古学・民俗学・自然史資料の収集、研究、展示を進めています。収蔵点数は約3万8千点で、貸し出し可能な資料もあります。学芸員による展示の説明も可能です。寄贈図書・雑誌の収集に努めて、郷土史研究のアドバイスも受けられます。刊行物としては、『文化資料館調査研究報告』（18冊）、『資料館だより』（平成13年3月・108号まで）、『茅ヶ崎自然の新聞』（20年5月・278号まで）、以上2種類は休刊、『ちがさきの石仏』（12号）、『特別展図録』、考古・自然見学会・文化財めぐり・端午の節供・お月見・雛祭りなどのレジュメがあります。『広報ちがさき』に連載中の「茅ヶ崎の宝物」「茅ヶ崎の社寺

林」などは最新の情報として参考になります。また、『広報ちがさき』の指定文化財、茅ヶ崎の歴史、郷土芸能、地名などの過去の連載記事も当時の写真なども含めて貴重な文献といえます。

18号まで号を重ねた『文化資料館調査研究報告』は、専門家、市民、市職員など多くの投稿原稿によって編集されています。考古学、石仏、昔話、浜降祭、スポーツ史、昆虫、鳥類、植物、苔などの記録、烏帽子岩の調査報告、講演記録など地域の情報の宝庫といえます。たとえば、18号に掲載された「旧和田家住宅の普請と職人」は、地域に根ざした民俗と歴史の両分野に関連する得難い論文の一つといえます。

民俗資料館（堤 旧和田家住宅、旧三橋家住宅）には、民俗資料の展示も多く参考になります。旧和田家住宅は近年屋根の全面葺き替えを行い 150 年前の建築当時の様子が復元できました。ここでの民俗行事の復元には多くの市民が参加して盛大に行われています。授業の一環として参加をお勧めします。（文化資料館は 420 冊以上刊行）

公民館（5 館）では、館ごとに『公民館だより・館報』を刊行しています。郷土史も連載されていますので身近な歴史を知ることが可能です。郷土史講座、フィールドワークのレジュメなども参考になります。青少年会館（2 館）でも郷土史講座が時々開かれています。

茅ヶ崎市美術館は、市ゆかりの作家の美術作品を 1,300 点余収蔵しています。特別展の図録（36 冊）、絵はがき（57 点）を作成し、参考図書として各美術館の特別展の図録などの収集にも努めています。特別講座・美術館講座も開催しています。

次の施設は公開施設ではありませんが、特殊なコレクションを所蔵しているので、

許可を得てから訪ねてください。

梅田文化財収蔵庫（考古・民俗資料、図書・雑誌の収集）、文化財調査事務所（考古資料、図書・雑誌の収集）、教育研究所（教育関係資料、図書・雑誌の収集、教育史の刊行）、各市立小中学校（三橋兄弟治・臼井恵之助・石井抱旦氏らの作品を収蔵、記念誌の刊行）、平和学園高等学校図書館、文教大学図書館（詩集のコレクションにみるべきものがあります）、文教大学湘南総合研究所（紀要・湘南フォーラムなどを刊行）などです。

茅ヶ崎市企画部文化推進課市史編さん担当（82-1111）

資料の収集・保管の状況と『茅ヶ崎市史』などの刊行物をみてみましょう。

昭和 22 年（1947）10 月に市制を施行した茅ヶ崎は、昭和 52 年（1977）10 月に市制施行 30 周年を迎え、それを記念する事業の一つとして『茅ヶ崎市史』の編さんが企画されました。市域は江戸時代（近世）の 23 の村から形成されていますので、それぞれの村の名主や組頭などの村役人を務められた旧家を訪ね、今日まで大切に伝えられてきた古文書（こもんじょ）の収集から開始しました。市内の古文書は近世から近現代まで 3 万点余が発見され、それは、『茅ヶ崎市史資料所在目録』の 13 冊に、地域別、所蔵者別に年代順（編年体）で整理されています。近世の崩し字文字は難解ですが、歴史研究の基本といえますので、辞書を片手に一字一字の解読が必要です。主要な資料はマイクロフィルムで保存してあります。所蔵者の承諾が得られれば公開することも可能です。積極的に利用され論文にまとめていただきたいものです。

古文書と一緒に、写真も収集、整理されています。個人や小中学校所蔵の「アルバ

ム」を借用して一点一点地道な複写作業が担当者によって行われました。「絵はがき」もたくさん収集しました。「茅ヶ崎名所」「相州茅ヶ崎名所」「茅ヶ崎八景」「南湖院」などのシリーズもの、林屋、大井写真館、茅ヶ崎館などの発行所を記したものもみられます。複写数は1万数千点を超えます。目録は刊行していませんが、索引によって利用しやすくなっています。戦後市域に進駐軍が駐屯した時期がありました。進駐軍の海岸での演習、進駐軍の兵隊が撮影した駅前や市内の風景なども、茅ヶ崎の特殊性を示す資料といえます。編集員が米国の首都ワシントンD.C.の米国立公文書館・同議会図書館・マッカーサー記念館などを訪ねて収集した大変貴重なコレクションもあります。

材質や形態は色々ですが、720点余のパネルがあります。必用に応じて貸し出しも可能です。授業で使われた先生もいました。学校や自治会の文化祭で展示したこともありました。

参考図書は、『神奈川県史』『藤沢市史』『平塚市史』『寒川町史』ほか、県内の市史・町史、それに関わる報告書、研究雑誌などが多数あります。市域の研究には有益な資料といえます。『国史大辞典』をはじめ各種の歴史辞典も備えてあります。

以上の、古文書、写真、参考図書を基本にして、市史が刊行されました。

次に、刊行物の内容をみてみましょう。

『茅ヶ崎市史』1（資料編・上、昭和52年10月刊行）は、古代から近世の資料集です。古代中世の市域に残る文書資料は板碑などで、ほとんどが「吾妻鏡」や「平家物語」などからの引用です。大庭御厨に関する「天養記」は伊勢神宮まで撮影にいきましました。近世の資料は一部刊行物からの引用がありますが、ほとんどが地域の資料です。

『茅ヶ崎市史』2（資料編・下）は、近代・現代の資料集です。幕末から昭和22年の市制施行までを取りあげ、一部分昭和30年の小出村の合併の記述もあります。

以上2冊の資料集は、資料それぞれに解説を付けて理解しやすく、それに目を通すだけでも地域の歴史が分かる編集になっています。利用しやすい資料集です。

『茅ヶ崎市史』3（考古・民俗編）は、考古、民俗、仏像の3分野でなっています。

昭和55年の考古の遺跡数は114カ所でした。その後30年を経て現在は214カ所と大幅に増え、埋蔵文化財担当者の努力による調査の進展が伺えます。昭和50年代中頃までの茅ヶ崎の考古学の集大成といえます。今日、新聞記事にもなり貴重な史跡として話題性も多く、市民の関心も高い「七堂伽藍跡」の本格的調査もこのときに始まりました。見学会も開催し、専門職員の説明もありますので、参加してください。

民俗の市域全体の組織的調査はこのときが始めてです。山・里・海と3分類をして記述したのが特徴といえます。現在でも、この巻をテキストに民俗の勉強をしているグループも多いようです。明治・大正期の市域の生活史を知る上での基本的な1冊といえます。

市内に民俗学者の柳田国男の別荘があった関係で、その全集に「茅ヶ崎」が何度も出てきます。研究の手がかりにしてください。

仏像は、市内全寺院の協力を得て、本尊と主要な仏像の撮影と計測を行いました。ファイアースコープで仏像の胎内の年号などを読み取り、文献資料としての活用も可能となりました。全寺院の本格的文化財調査はこれ以来行われていません。

『茅ヶ崎市史』4（通史編）は、1・2・3巻を基にその後発見された資料を加えた本

格的な通史です。その後の市域の歴史を記述する上の、基本的文献としての利用価値は高く評価されています。

『茅ヶ崎市史』5（概説編）は、通史編を基に読みやすく、理解しやすく、を第1に考えて編集員の1人が書き下ろしました。記述はそれぞれの分野の専門家の監修を受けて進められました。100近くの「コラム」も興味深く、読み物としても楽しい編集です。付録としての年表・図版（領主・町村の変遷、首長、人口などの変遷）が役に立ちます。「索引」の作成は当時としては先駆的な作業でした。今日でも市史の有益な索引として利用価値は高いといえます。

昭和62年（1987）の市制施行40周年の記念に『写真集 茅ヶ崎きのうきょう』が刊行されました。最古の地層の姥島から、明治・大正・昭和の3代の写真を収録し、近現代の市民生活の展開、変遷に重点を置いています。目次を一覧すれば分かりますが、明治・大正期で「別荘のはじまり」「祖父母達の農作業」など、戦前期で「東海道風景」「遊歩道路の開通」など、戦後期で「六・三・三制のはじまり」「海の幸」など、79項目を立てています。収集した1万数千点の写真の中から900点余を厳選しました。比較のために現状写真も掲載しています。この現状写真も25年以前の記録となり今日では貴重な資料となりました。目で見える歴史書としては、最適といえます。理解しやすい記述と手頃な値段なので、座右の書として活用して欲しい1冊です。

『茅ヶ崎市史』4（通史編）、5（概説編）、『写真集』の3冊は、茅ヶ崎歴史の入門書として繰り返し繙いていただきたい図書です。昭和50,60年代の刊行物ですが少しも古さを感じさせない内容で、郷土史研究の必読書といえます。

続いて、市制60周年を記念して、『茅ヶ

崎市史・現代』（全10巻、平成4年～20年）が刊行されました。『茅ヶ崎市史』の下限をほぼ昭和22年の市制施行頃までとしたので、それ以降を対象とした刊行物ですが、論述は戦中から始まっています。

『茅ヶ崎市史・現代』5・6の「新聞集成 I・II 市民の表情（1945－85）」は、数種類の新聞のマイクロフィルムから市域関係記事を抽出し、重要記事を選択し、新聞の割付のように編集したものです。新聞を読む感覚で頁がめくると好評です。「事項」「人名」「地名」の各索引も利用価値は高く、新聞記事で戦後の40年間の流れを掴んだら個別のテーマに進んでみましょう。

『茅ヶ崎市史・現代』1（通史・60年の軌跡）は、戦後の60年の歩みを、膨大な資料やさまざまな証言を基に書き下ろした現代の通史です。今後、戦後の茅ヶ崎を考えるには不可欠な通史といえます。

『茅ヶ崎市史・現代』2（資料集 I 茅ヶ崎のアメリカ軍）は、太平洋戦争末期から昭和34年の辻堂演習場返還（チガサキ・ビーチ）までの戦後復興の過程を、豊富な在米資料や証言からたどる資料集です。市史現代の代表的1冊といえます。

『茅ヶ崎市史・現代』3（資料集 II 「戦後」日々の記録）は、戦後復興と市民生活の断面を物語る資料集です。

『茅ヶ崎市史・現代』4（資料集 III 茅ヶ崎の暮らしを語る）は、戦後復興から今日に至る半世紀の市民生活の移り変わり、市勢の伸展などを、社会の様々な分野で活動された方々の証言でまとめました。

『茅ヶ崎市史・現代』7（地図集 大地が語る歴史）は、茅ヶ崎の地形の成り立ちを、航空写真、村絵図、地形図、都市計画図などを駆使して地図に見る歴史情報を説明した地図集です。茅ヶ崎の風土、海岸、砂丘、川、谷戸などの説明も地域に根ざし

たものになっています。地図のほとんどを網羅しています。

『茅ヶ崎市史・現代』8（図説 市民の半世紀）は、戦後50年の市民生活の推移を写真やグラフを盛り込み、目で見える戦後史です。人口、駅の乗車人数、農作物の収穫量、漁獲量などのデータも利用価値が高い資料といえます。

『茅ヶ崎市史・現代』9（ちがさき クロニクル 1945－2002）は、戦後の市民生活の推移と市勢伸展の経緯を1年ごとの主な出来事と関連年表で紹介した年代記です。市政データは歴代主要役職者、行政組織変遷、各種選挙、施政方針などの基本的な資料が掲載されています。

『茅ヶ崎市史・現代』10（レンズのなかの茅ヶ崎－昭和の記憶－）は、昭和30年代の写真を中心に、移り変わる風景、写真を読む、ノスタルチック茅ヶ崎のテーマで市民生活の推移を紹介しています。昭和30年代も懐かしさを感じる今日、郷愁を誘う写真集といえます。かつて文化資料館の特別展で「昭和30年代」をテーマに取り上げたときには、何度も足を運ぶ人が多く大好評だったようです。近い将来には昭和40年代、50年代が同様に懐かしさを感じる時代になるかもしれません。古いものだけが歴史の資料ではないといえるのでしょう。平成もはや20年を超えてしまいました。

『茅ヶ崎市史史料集』は、次の5冊が刊行されました。続集も編集中ですので期待してください。簡単に紹介をしましょう。

第1集『明治の巡査日記－石上憲定「自渉録」』は、明治中期から末期にかけて本市域などに駐在巡査として勤務した日々の日記。近代化する本市域社会の側面を伝えています。

第2集『藤間柳庵「年中公触録」』は、天保13年（1842）から明治2年（1869）ま

での幕府から出された触書を柳島村の名主がまとめたものです。

第3集『「茅ヶ崎地誌集成」』は、江戸時代後期から明治時代前期までの本市域大字ごとの地誌をまとめたものです。茅ヶ崎の概要を掴むのには最適です。

第4集『「和田篤太郎日記」』は、黒船来航から幕末に至る、当時の地域社会の変化が伺える萩園の村民の日記です。

第5集『藤間柳庵「太平年表録」』は、幕末維新期の変革の時代の見聞を柳島村の名主が書き残したものです。

各集とも市域史を研究するには不可欠といえる資料集で、部分的には幾つかの資料集に掲載しましたが、利用価値が高いため1冊の資料集としてまとめたものです。

どれも貴重な資料ですが、最近藤間家の資料に関心が寄せられているようです。平塚市博物館で藤間家資料が展示され水運業の解明に寄与するところが大きく、また、横浜開港150周年に関わる講演会でも「太平年表録」が多く引用され当時の世相を知る上で第一級の資料との評価が与えられるなど単に茅ヶ崎だけの資料という枠を超えた歴史研究者の関心を得ています。

藤間家の古文書は、柳庵の直系のご子孫である藤間雄蔵氏と奥様のお二人の献身的なご努力によって柳島のご自宅に今日も大切に伝えられています。個人的な考えですが文化財として指定されて然るべき資料といえます。雄蔵氏の高いご見識と資料を後世に伝えたいとの使命感によって近年「太平年表録」をはじめ数種類の資料が復刻され、歴史研究及び学校教育において多大な貢献をなしています。復刻された柳庵の筆跡で「太平年表録」を読み進め、ときに資料集の『藤間柳庵「太平年表録」』を開くという贅沢な楽しみができました。歴史に興味を持つ市民にとって、これ以上の喜び

は得られないかもしれません。この復刻版を一度は手にしてください。びっくりされますよ。そして、授業での利用価値は高いと感じると思います。

藤間家の古文書が永久に柳島の地に残り歴史の解明に役立つことを切望しています。藤間家所蔵の数百点をはじめとして市域には3万点余の古文書がありますがその継承の難しさが、課題といえるでしょう。資料の大切さはもちろん、今日まであても命があるかのように残り、我々が手にする奇跡ともいえる現象を授業で伝えていただきたいと思います。少々逸脱しました。

次に『茅ヶ崎市史ブックレット』の11冊をみてみましょう。ブックレットは、市史編さん事業の成果を、多くの市民の皆さんになるべく早くまた手軽に楽しんでいただけるように興味のあるテーマを採り上げ、読みやすい文章と写真などを豊富に掲載した楽しい編集によるシリーズで毎年刊行する、との方針の基にまとめられました。どの冊子も教材研究には大変力強い見方になります。各巻40数頁と読みやすく、安価なのもうれしいところです。一度は手に取ってください。表題を記しておきましょう。

1 コロネット作戦

— 第2次世界大戦と茅ヶ崎 —

2 ちがさき 歴史の散歩道

3 萬鉄五郎と茅ヶ崎の風景

4 茅ヶ崎むかし語り

5 南湖院 高田畊安と湘南のサナトリウム

6 茅ヶ崎の歴史遺産

7 銀幕のなかの茅ヶ崎

8 市民の戦争体験—兵役・戦場・敗戦—

9 近代茅ヶ崎の群像

10 茅ヶ崎駅の一世紀

駅と駅前から見る明治・大正・昭和

11 湘南の風景

— 茅ヶ崎・海と緑の近代史 —

第12集は、堤の浄見寺に墓所のある「大岡越前守忠相」に関する内容です。これは茅ヶ崎の歴史を超えて日本史に関心のある方は手にして欲しい1冊です。

『茅ヶ崎市史研究』は、32号で終刊しましたが、300点もの論文、資料紹介、調査報告、書評、インタビュー、文献目録などが掲載されています。学会で高い評価を得た論文も掲載されています。最終号の第32号の「総目次」を参考にして論文を探すことが可能です。

『市史研究』のあとを受けた『ヒストリアちがさき』（創刊号）は、市民に親しみやすい編集を心がけて刊行されました。

また、『茅ヶ崎市史研究』『ヒストリアちがさき』に連載されている「茅ヶ崎市史文献目録」には7,550点余の茅ヶ崎市域の関連文献を収録しました。多くは市立図書館や市文化資料館に所蔵されている文献ですので参考にしてください。（市史編さん担当は80冊以上刊行）

次に、諸機関・諸団体の簡単な資料の所蔵・刊行状況をみてみましょう。

平和を考える茅ヶ崎市民の会の茅ヶ崎戦跡研究会では『茅ヶ崎にも戦争があった』など精力的に市内の戦跡資料の収集に努めています。

茅ヶ崎郷土会（郷土ちがさきの刊行・22年1月・117号、文化祭の展示・レジュメ）

国立国会図書館（戦後の茅ヶ崎市域刊行の雑誌—プランゲ文庫—のマイクロフィルム、南湖院関係資料など多くの資料を収蔵）

神奈川県立図書館（戦前の茅ヶ崎町の要覧、家庭学校関係ほか）

神奈川県公文書館（高座郡役所関係のマイクロフィルム、県内自治体史ほか）

藤沢市中央図書館（新聞のマイクロフィルムほか）

藤沢市文書館（藤沢市史、遊行日鑑などの刊行、神奈川新聞湘南版ほか）

藤沢市教育委員会博物館建設準備担当（米国立公文書館などの占領期の資料・写真ほか）

寒川文書館（18年11月開館、寒川町史、町史研究、報告書・浜降祭などの刊行）

平塚市美術館（湘南ゆかりの美術作品の収集・展示、萬鉄五郎・三橋兄弟治作品ほか）

平塚博物館（相模川水運関係の資料の収集、平塚市史などの刊行）

以上、郷土史を調査・研究するための必読図書の概略及び資料の所属機関などの説明をしました。これは郷土関係の図書や資料のほんの一部です。図書館など関係機関で時間をかけて、じっくりと取り組む必要があります。参考図書は無限といっても過言ではありません。ご自分のテーマで「文献目録」を作成してください。

校務でご多忙でしょうが、ご自分の研究の課題を探して、取り組んでください。それが授業に必ずや役立つものになるはずです。かつて、「考古学」に関わる文献（1,063点）や「旧相模川橋脚」に関わる文献（181点）を集めたことがありました。参考になると思います。

4 終わりに

さて、そろそろ説明を終わりにしますの
で、Q4の難問を考えましょう。

筆者の考える1冊を紹介します。実際、
日々のレファレンス業務で一番頼りになる
1冊です。図書館のレファレンスの担当者
にも紹介しています。

それは、藁品彦一先生が現職の小学校の
校長先生のときにお一人で、ほぼ1年間
まとめられ、各分野の専門家の監修を経て
刊行された『茅ヶ崎市史』5（概説編）と

考えています。先生は、市内円蔵の旧家に
生まれ、市域の学校を卒業し、教員をされ
ていました。茅ヶ崎市史編さん委員・同編
集員を長く務められ、200人以上の古老の聞
き取りを下地にして、ご自分の体験を加味
し、数多の古文書を繙かれた先生でなくて
は執筆できない歴史書といえます。歴史的
記述の正確さはもとより文章表現に学ぶと
ころの多い著作です。茅ヶ崎をこよなく愛
され、多くの人脈を駆使された一大労作と
いえます。今後、これを上回る作品は難し
いと考えています。

なお、先生の経歴は『茅ヶ崎市史研究』
第28号の「藁品彦一先生を偲んで」に詳し
く記されています。その「主要な著作・論
文・著書」を手がかりにして先生の論文を
読まれることをお勧めします。郷土史研究
の参考になる事柄が盛りたくさんです。

担当者の知識の限界で、「考古学」「自
然史」「文化財」「文化資料館」の説明は
省略しました。市役所と教育委員会には各
分野の専門知識を持つ職員がいますのでい
つでも紹介します。疑問点があれば聞きに
来てください。

ご検討をお祈りいたします。

注) 必読図書・900冊の概要は次のとおり
です。

・図書館	132
・文化財保護担当	90
・文化資料館	420
・美術館	36
・市史編さん担当	80
・郷土会	117
・その他(特別展図録等)	25

計 900

追 記

突然、訪問を受けたので、準備のないままに大まかな説明をしました。

「900冊」というのも如何なものでしょうか。一つの目安にしていいただければと思います。

本格的に茅ヶ崎の歴史を繙くには、市立図書館の「k郷土資料」に分類されている1万冊余の図書、文化資料館に収蔵されている3万8千点余の「人文・自然史資料」、美術館に収蔵されている1,300点余の「美術資料」、市史編さん担当で把握している3万点余の「古文書」、1万数千点の「写真・絵はがき」及び米国立公文書館・同議会図書館など米国諸機関から収集した「在米資料」、梅田文化財収蔵庫で整理・保管されている正に膨大な「埋蔵文化財資料」（6千数百箱、個別に数えれば天文学的数字です）、市史文献目録として抽出されている7,550点余の「文献」、その他各機関で寄贈や交換で入手した北海道から沖縄県まで全国の自治体の「刊行物」およそ4万5千冊余等々、15万点を超えるのは確実です。

しかし、これらの資料も簡単に収集できたものではありません。50年以上の年月と歴代担当職員の献身的な努力で収集、保管され、市民の財産として今日まで受け継がれてきたものです。

①倉庫がない、②財政が厳しい、③役に立つのか、④古くて汚い等々、目先の一時的な理由で、後世へ伝えられなくてよいのでしょうか。

どのようにして収集されたのかを振り返れば、先人の努力のあとが理解できると思います。

- ・昭和30年に市立図書館が開館し、郷土資料などの収集を開始。
- ・昭和46年に市文化資料館が開館し、民

俗・考古・自然史資料などの調査・収集・研究・展示に着手。

- ・昭和49年に市史編さん事業が開始し、古文書・写真・絵はがきなどの調査・収集・研究に着手。
- ・昭和55年から埋蔵文化財の本格的、調査・研究に着手。
- ・昭和63年に市史現代が開始し、在米資料調査などに着手。
- ・平成10年に市美術館が開館し、美術作品などの収集に着手。

以上のような経過で、15万点を超す資料がゆっくりですが、着実に蓄積されてきたのです。

緊急の課題は、この膨大な資料を整理・保管する倉庫、研究スペース、展示・活用スペースの確保です。茅ヶ崎の未来を考える貴重な材料として、生涯学習、学校教育、市の政策決定などの場で幅広く活用される資料と位置づけられるのは確実です。正に究極の情報公開といえますが、課題は山積みです。

早く、資料や情報を市全体で「共有」する観点を確立したいものです。

末筆ですが、今回も多くの方のご指導・ご協力をいただきました。

須藤格さん・高橋知さんの適格なアドバイス、土方亨江さんの迅速なデータ処理、そして黙って熱心にメモを取っておられた「先生」に、深謝いたします。

会話の形式で記したので、重複も多く読みにくい点、ご理解をお願いいたします。

（平成22年3月12日記）

* 茅ヶ崎市企画部文化推進課 市史編さん担当